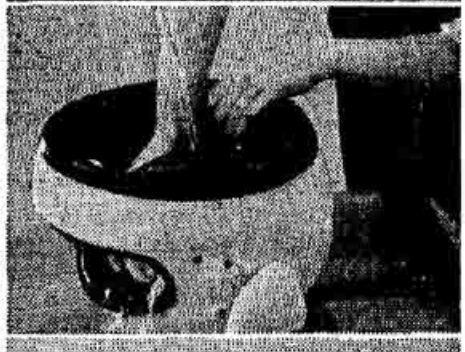
DECEMBER 1989 VOL.20

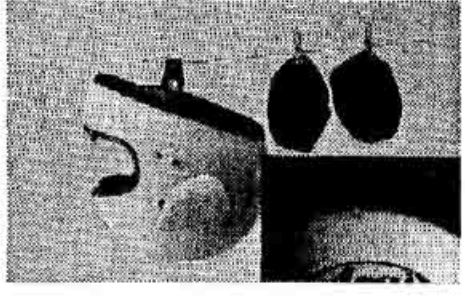
ARAI NEWS

アライヘルメットには、天井部に丸いキャップがついていることをお気付きの事でしょう。これはドレン穴のキャップです。このドレン穴は、インダクションポッドを取り付けるためだけでなく、文字通りの水抜きにも使えます。今回はこのドレン穴がなぜ開けられるようになったのか、その歴史を説明させて下さい。

10数年前、アライが本格的なモトクロス用ヘルメットMXの開発を進めていた頃の話です。モトクロス場を実際に走って開発を進めていくと、ジャンプでのぐらつき、ヒサシの角度、マウスガードの位置などオンロード用とは異なる数々の問題が発生しました。もちろんアライでは、こうした問題点を一つ一つ煮詰めて着実に解決してゆきました。しかし、走り終わってからも難題が一つ生まれたのです。オフロードを走り回った後のヘルメットは、汚くてしょうがありません。これを解決しようにも、内装を取り外れるようにするとかぶり心地に影響が出てしまうし、(アライでは、すでに20年近く前に、内装が取り外れるヘルメットを発売していたのです。)水でジャブジャブ洗うと乾かなくなってしまう。こんな苦心の上に浮かび上がったのが水抜きの穴を開ける案でした。

ひとくちに穴を開けるといっても、穴を開ければ必ず安全性に影響を及ぼします。ヘルメットの中で、もっとも安全性に影響のない箇所を選び、もちろん貫通試験にも通るような寸法が調べられました。こうして取り付けられたのが天井のドレン穴です。このドレン穴を取り付けたモデルでは、ヘルメットごと水でジャブジャブ洗って、それまでは最低でも3〜4日は乾かなかったものが、日陰干しでも丸1日で乾くようになりました。





その後、オンロード用ヘルメットでは、ベンチレーション効果を高めることが課題となり、安全性に影響のないドレン穴を利用したシステムが開発されました。これがインダクションポッドです。この取り付けを可能とするために、オンロード用モデルにもドレン穴が開けられるようになったのです。

ところで、最近では、内装の取り外れる物が、あたかもトレンドであるかのように言われています。しかし本来、内装の着脱というのは、ヘルメットをいつも清潔に大切にあつかうライダーにとってありがたいものでなければなりません。ところが、その多くは、何回も外して洗っていると、マジックテープが痛んだり、布地が縮んで取り付けられなくなったりと、大切に扱おうとすればする程、トラブルの可能性が高くなるような、未完成なものが多いようです。

内装を手入れするのはいいことです。だからといって、ただ取り外れるようにするだけが解決方法ではありません。アライでは、システムパッドのように、もっとも汚れやすい頬の部分は、取り外して洗いやすくし、また、オンロードモデルでも、ドレン穴を利用した丸洗いができるように内装も改良してきました。これにより、現在ではオン・オフ問わずドレン穴の開いているすべてのモデルの丸洗いが可能になったのです。

天井のドレンキャップは、小さな穴ですが、10数年前モトクロス場を走り回っていなければ生まれなかったものです。かぶり心地や着脱の際の心配もなく丸洗いが可能になったドレン穴。ここにもアライだけの地道な積み重ねの歴史が生きています。

ドレン穴の秘密

(株)アライヘルメット
〒330 埼玉県大宮市東町2-12
TEL(048)641-3825〜7

●アフターサービスの窓口は品質管理課です。
製品の事なら、お気軽にご相談ください。
直通 TEL(048)645-3661